The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞伊井春樹著『小林一三は宝塚少女歌劇にどのような夢を託したのか』
Author(s)	小田桐, ジェイク
Citation	語文. 2017, 109, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73313
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

伊井春樹著『小林一三は宝塚少女歌劇にどのような夢を託したのか』

小田桐　ジェイク

宝塚歌劇団は国内ではもちろん、海外でもよく知られた存在である。阪急電鉄の一部として運営され、現在は梅田駅から「宝塚線」に乗れば、終点である宝塚駅から出てすぐのところに劇場がある。しかし、明治後期から大正初期の、阪急電鉄の運営は今と大きく違い、小林一三が目指した目的地が今とは違うものであったことが本書では検討される。

本書の帯には「阪急電鉄開業からタカラヅカ発足まで」とあり、開業者である小林一三の活動を追いながら、箕面駅周辺の発展と宝塚歌劇団とのつながりが明らかにされる。本書の目次は次の通りである。

プロローグ
一　最も有望なる電車
二　箕面有馬電気軌道電車の発車
三　箕面動物園の開園
四　山林こども博覧会
五　巌谷小波の演劇活動
六　大阪お伽芝居と高尾楓蔭
七　翠香殿のにぎわい
八　宝塚新温泉のオープン
九　宝塚パラダイスと少女歌劇のはじまり
十　宝塚少女歌劇の上演
エピローグ――あとがきにかえて
参考文献／図版出所／関係年表／人名・事項索引

各章では当時の新聞や宣伝の絵や写真等の資料を使い、新聞記事の記述を追いながら広くは知られていない宝塚歌劇団の土台へとつながる道について説明される。

まず第一章は、緑の少ない大阪市内から自然の多い避暑地としての箕面駅への線路の準備が明らかにされる。大阪行きの通勤電車とは違い、箕面行きの電車には「遊覧電車」としての役割がある。設立されてすぐは「箕面有馬電気鉄道株式会社」といい、箕面と有馬の両方の温泉地を中心に「煤煙の町から郊外へ」多くの乗客を運んだ。第二章は、実際の線路の設置の様子が詳細に検討される。当初は梅田駅から箕面駅への見物を目的とした線路だったということの、新聞記事をはじめ、広告や宣伝の言説で明確にされる。小林一三自身が執筆した電車の広く範囲の歌が学校に配布され、若い学生に歌われていた。

現在は閉鎖された箕面動物園が第三章の中心となり、動物園へとつながる「遊覧電車」としての一面が明確にされる。終点の箕面駅の独特な「ラケット形」が内田百閒の回想にもあり、また大阪で生まれ、現在の茨木市で育った川端康成の小説『少年』でも箕面動物園が言及される。箕面動物園のインパクトが検討され、

本書の三十七頁で「百年の暦を歩むにいたったことは、不思議な歴史の展開といえよう」と表現されている。

第四章は箕面駅周辺にテニスコートや野球場を設置し、大人も子供も来てもらう計画が小林一三の流行への敏感さをもって検討される。これらの広場が多くの大会を催す場所となり、多くの客を呼ぶことになる。また、第五章にあるように、家族を呼ぶことが中心となる。巌谷小波がドイツ留学から日本に戻り、本格的に脚本を書くようになってからの、箕面駅周辺の児童博覧会とのつながりも明らかになる。これらの活動が今現在の宝塚歌劇団の土台となる。当初の主なテーマが伝統的な「桃太郎」であったことは、宝塚で初めて演じられる「ドンブラコ」と無関係ではないことも理解できる。

大阪での「お伽劇団」の結成に関係する高尾楓蔭という劇作家の児童教育に関する熱心さが第六章の中心である。この児童教育への熱心さは演劇で取り上げられ、広い地域で好評を得る。児童教育の教訓性について検討される第七章では、巌谷小波の「桃太郎主義」とその普及について述べられる。お伽噺のテーマと小波の「桃太郎主義」が後の宝塚へとつながる重要性が見出される。そして、箕面駅周辺で催された山林こども博覧会と関連の絵葉書の宣伝が詳細に提示される。

第八章と第九章は温泉地の後に劇場の土台となる宝塚の変遷を主に追っていく。箕面動物園が次第に住民の間で問題となり、閉鎖することは、しばしば「失敗」として扱われた。しかし、その「失敗」であった箕面動物園とその周辺の一時的な人気が後の宝塚駅周辺の成功につながることは明確である。電車の終点を箕面駅から宝塚駅に移動し、「新温泉」を開き、小林一三の新しい夢が浮上する。最初から客層を家族中心にし、世界初の室内プールが建設される。ただ、地下水をそのままプールに入れた冷たい水は、真夏でさえ人気を得られず、冬場はプールの上に蓋をして、温泉の客に無料の演劇を楽しんでもらった。このような動きがよく知られた「プールから劇場へ転用した」伝説の第一歩である。

最終章の十章は久松一声という脚本家の言う「今の世の中には子供に見せる芝居がない」と巌谷小波の「桃太郎主義」との関連で、宝塚劇場の発足を追っていく。少女歌劇団が結成されるが、小林一三は西洋では人気のある歌劇団は日本では流行しではないかと不安を抱えていた。しかし、この少女歌劇団の訓練は厳しく、プロに近い演出ができるようにした。新温泉客に大人気となり、すぐに広まっていく。ここから宝塚少女歌劇の伝説が始まる。

以上は本書のだいたいの梗概である。宝塚歌劇団の発足に関する情報が本書では充実している。あまり知られていない、昔の箕面駅周辺が今現在の宝塚歌劇場のルーツにつながっている。また、その動きを常に支えていた小林一三が書名の通り、どのような夢を託したのかが明らかにされる。

（ミネルヴァ書房、二〇一七年、二六八頁、二、八〇〇円＋税）

（おだぎり・ジェイク　本学大学院博士後期課程）